

めんど草

sekosampe

めんど草

あー、めんどくさい。

めんどくさくって、めんどくさくって、しょうがない。

私？ 私は、草です。どこにでも生えている雑草ですが、この世には、雑草という名前の草はありませんよ。

みんなちゃんと名前があります。私の名前は「めんど草」（めんどくさ）といいます。

性格は、ひと言で言うと、めんどくさがりやです。

名は休を表す、と申しますが、私、めんど草は、生まれつきのめんどくさがりやで、何をするのにも、めんどくさい。

ただもう、テキトーに生きているだけで、世の中の役に立とうとか、立派なことをしてみようとか、何にも思わない、めんど草です。

私のとなりには、青々としたほうれん草が生えています。ていうか、ここはほうれん草畑。でも、この畑の主人は、草を抜かない主義なので、雑草がはびこっています。

私は、ほうれん草さんに話しかけてみました。

「いやあ、がんばってるね、ほうれん草！」

「……………ぼくに話しかけないでくれたまえ。忙しいんだ。」

「何で？」

「何でって……根っこから水分や養分を吸い上げたり、光合成とか、いろいろ……」

「かあー、さすがだねえ。よっ、ほうれん草っ！」

「ぼくをバカにしているのかね、キミは？」

「バカになんてしてませんけど……でも、めんどくさくない？もっと楽にすれば？」

ほうれん草はフンッと笑いました。」

「ほうれん草は選ばれた草だからね。きみたち雑草とは違うんだ。ぼくらには使命があるんだ」

「使命？」

「そう。人間の役に立つことさ。おいしくて栄養のある食べ物になって、人間の身体をつくるんだ。ポパイってマンガを知ってるかい？ ほうれん草はすごいんだ。キミたち、役に立たない草とは、草が違うんだ。」

私は、涙目になって、言いました。

「じゃあさ、じゃあさ、役に立たない草は生きてちゃいけないの？」

ほうれん草は、笑って、言いました。

「生きていてもいいけどさ……もっと恥ずかしそうに生きてれば？」

あー、もうっ。ほうれん草ってば、すげえエラそう…。

私は、ほうれん草と会話するのが、とてもめんどくさくなって来ました。

「キミらが、めんどくさいとかなんとか言っているうちに、ぼくらはいっしょうけんめい勉強してるんだ。努力しない、向上心のない草は、ダメな草だ」

そのとき、すっとんきょうな声が聞こえました。

「あー、あほくさ」

それは、私の親友、あほ草でした。

「なにゆうてまんねん。人間に食べられることが、そないに立派なことデッカ？あんたはん、それで、ほんまに幸せデッカ？」

ほうれん草はムツとして言いました。

「ああ、幸せだね。キミたち雑草の幸せレベルが一くらいだとしたら、ぼくらほうれん草は幸せレベル百二十ぐらいだね」

「あほくさ…...幸せは、レベルでも、ラベルでも、おまへんで」

私は思わず笑ってしまいました。ほうれん草は怒りました。

「だからキミたち雑草とは話したくないんだ。さあ、もうむこうへ行ってくれたまえ。ぼくは勉強の時間だ」

「むこうへ行けと言われても、根っこが生えてるから行けまへん……」

そのとき、ナナホシテントウムシが飛んで来て、ほうれん草の葉に止まり、葉っぱをムシャムシヤ食べ始めました。

「ああっ、食べられるっ。虫なんかに食べられたくないっ。ぼくは人間に食べられるんだ……」

ほうれん草はパニックになってしまいました。

あほ草は言いました。

「ナナホシテントウムシさん。ほうれん草よりわいの方がおいしいで。わいを食べなはれ。な、ほうれん草はかんべんしてやんなはれ」

私はやっぱり、ほうれん草より、あほ草のほうが好きだな。

あなたは、どうですか？

おしまい（笑）